
人生後半になったのにこれかよ！

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生後半になったのにこれかよ！

【Nコード】

N8186Y

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

定年になったのに訪れるアップercットのパンチ。

(前書き)

はいりハビリ中です。

今日で定年退職だ。

抽斗を整理していると、一枚の写真が出てきた。

若かった頃の早朝野球メンバーの写真。

左端がキャッチャーの僕。

右端がファーストの吾一。

後ろで微笑んでいるのが雛子。

並んでいるのが桐子。彼女たちはお茶やおしぼりを用意してくれるマネージャーのような存在だった。

日曜日の七時に待ち合わせをして向かったグラウンド。

グラウンドと言っても、セメント工場の駐車場の隣にあった空き地。

土は硬いところどころ雑草もあって、時には草むしりをしたものだっ

「ねえ、伸二さん」

僕を呼ぶのは雛子。今では僕の家内。よく気が付く優しい娘だった。みんなが好きになるような丸顔のショートカットがよく似合っていた。今でこそ、体重は僕よりありそうだが、あの頃は細かった。そんな僕たちのそばで、いつもケンカしていた吾一と桐子。

「昨日も言っただろう」

「聞いてないわよ。お茶だけでいいって言っただじゃないの」

「気を利かせろよ。握り飯ぐらい作ってくれたっていいじゃないか」

「あなたに命令される覚えはないわ」

二人は散々言っけても帰りにはけろっと忘れるような関係だった。

喧嘩をしない僕らに比べて、二人はオープンな感じでとても羨ましかった。

もちろん、争い事は嫌いなタイプの僕らには喧嘩になるような出

来事もなかった。それは妻の雛子が従順だったからだろう。

雛子はニコニコと笑いながら二人に声を掛けた。

「おにぎりだけでも、こんなに作ってきたから分けてあげる」

雛子の塩にぎりはとても美味しかった。

「あーあ、伸二はいい彼女で羨ましいなあ」

「どうせ私は悪い女よ」

ふくれっ面の桐子はそう言いながらも、塩にぎりを頬張った。この可愛らしさが気になって仕方がなかった。雛子とはもう男女の中ではあったが、僕の心にいつも気になる存在の桐子がいたのだ。もちろん吾一には話したことはない。

ふと、僕の視線の先にいるのが桐子だと気付いた雛子は、ポットからお茶を出してみんなに配りだした。僕はそんなことを気付かずに握り飯を頬張ったものだ。

あの日は残業があつて、会社を出たのが夜の九時。桐子は社長の秘書をしていたが、出張の帰りで会社に戻ってきたところだった。

「桐子さん、随分遅かったね」

「あら、伸二さん。まだいたの。東名で事故があつたからひどく渋滞になって」

「大変だったね。食事はした？」

「ううん」

首を振る桐子。二人で居酒屋に行った。

彼女のウィットに富んだ会話は楽しくて大笑いしながら、ビールが進んだ二人だった。

桐子の長い髪をひつつめにして留めているピンに、僕のスーツの袖のボタンが引っ掛かった。僕がタクシーを止めようと腕をあげたからだ。

「あ、いたた」

「ごめんごめん」

彼女の付けている香水が鼻をくすぐり、絡まった髪とボタンが二

人を密着させた。

白い項に思わず吸いつくようにキスをした。

驚いた様子だったが、桐子は怒らなかつた。酔っていたからだろ
う。

「ごめん」

上目遣いに僕を見る桐子の目が少し赤くて、泣かしたのかと思っ
て慌てて離れたら桐子がもう一度僕を見た。

その目に誘われるように二人はホテルに向かった。

翌日、グラウンドにいた二人はそれぞれの相手に気付かれないよ
うに笑っていた。

雛子にいつもより優しくした。

というより、雛子がくっついてきたのだ。

その日から雛子は積極的に動くようになった。会社でも帰る時も。
婚約したのはその一月後だった。

吾一は九州転勤が決まった。後を追うように桐子は会社を辞めて
いった。

そう思っていたのだ。

僕たちの結婚式に吾一は来たが、桐子は来なかつた。

雛子は寂しそうだったが僕はどこかでホッとしていた。

「桐子とはいっ結婚するの？」

雛子が尋ねると、吾一は首を振ってふられちゃったと呟いた。

「どうして？」

そう尋ねたが、吾一は遠距離だからと言った。僕の心臓はバクバ
クと音がしそうだった。

披露宴の間も祝辞の言葉も耳には入らなかつた。

桐子は追いかけなかつた？

どうして。

吾一は寂しそうだった。

二年後、彼も熊本の女性と結婚した。

花束を貰って会社を出た。

今日は退職記念に外で食事だ。

息子が洒落たレストランを探して二人分予約したと言った。

花束を持ったまま、レストランに向かうと雛子が誰かと話している。

なんと桐子だった。

久しぶりに会う桐子は相変わらず髪を一つにまとめ、年相応に美しかった。

懐かしいあの頃の思い出。

「おめでどう、伸二さん」

「ありがとう」

「こんな素敵なお店、いつ開いたの？」

雛子が嬉しそうに尋ねる。

桐子は一年前と答えた。

シェフは彼女の息子だった。

「いらっしやいませ」

彼は穏やかな表情で会釈した。

「母のお友だちですか」

「ええ、昔勤め先が同じだったの。おいくつ？」

雛子が尋ねると彼は二十八歳だと言った。

雛子は顔色が変わった。

僕と雛子の息子は結婚一年目に生まれて二十七歳。

あのときの……。

桐子の店を出てから雛子は吐いた。

「あの店の料理は口に合わないわ」

十一月だというのに生暖かい風が吹く。

どこかのお笑い芸人が言いそうだよ。

「人生後半になったのにこれかよ！」ってか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8186y/>

人生後半になったのにこれかよ！

2011年11月24日10時47分発行